

主 題：従順——仕える者になる——

聖書箇所：マタイの福音書 20章20-28節

1. 「高慢」について

高慢ということば、皆さんは何を連想されるでしょうか？国語辞書で引くと「人を侮って偉そうに振舞うこと」、また高ぶりは「おごり高ぶって無礼な態度をする」と書かれています。ヤコブはヤコブ4：16で「あなたがたはむなしい誇りをもって高ぶっています。そのような高ぶりは、すべて悪いことです。」と記しています。聖書は高慢は罪だと教えています。パウロはローマ1章でこのような思いは罪だとはっきりと私たちに教えています。この高慢について少し学んでみたいと思います。

1) 天使ルシファの墮落 イザヤ14：12-15

イザヤ14：12-15で天使ルシファの墮落のことが記されています。ここが被造物、神によって造られたものの最初の罪です。その罪は高慢の罪でした。天使ルシファは被造物にもかかわらず、神になろうとしました。自分を造ったものになろうとしました。その結果、彼は天から「落とされ」とあります。サタンの始まりです。

2) 律法学者・パリサイ人たち マタイ23章

また、イエス様がマタイ23章で律法学者、パリサイ人たちについて語っているところがあります。マタイ23：4-7を見ると、律法学者やパリサイ人たちの高慢さが記されています。彼らの心のうちはどうであったのか——。23節や27-28節に彼らは不誠実であり、汚れており、「偽善と不法で」満ちあふれていると書かれています。彼らの心のうちは高慢のかたまりであったということです。イエス様はそのような者たちに対して「忌まわしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。」と、彼らと呼ば捨てています。そして、このような者たちがどこへ行くのか——。33節で「ゲヘナの刑罰をどうしてのがれることができよう。」と、彼らの行き着くところは地獄だとイエス様は言われます。黙示録19：20では「火の池」ということばが出てきますが、そのことばと同じ意味を持ったことばです。

3) にせ教師たち 1テモテ6：3-4

パウロは1テモテ3：6で「高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。」、こうして新しく救われた者が長老、執事になることを戒めているのですが、「高慢になって、悪魔と同じさばきを受けること」がないようにと。また同じ1テモテ6：3-4には偽りの教師たちのことが記されています。彼らも高慢な者であったと書かれています。「あなたがたはむなしい誇りをもって高ぶっています。そのような高ぶりは、すべて悪いことです。」（ヤコブ4：16）とヤコブは言います。きょう私たちはこの高慢とは反対にある従順、また仕えるということと一緒に学んでいきたいと思います。

2. 従順

特に大切なのは、日本語で「従順」と訳されているギリシャ語は「聞いて行う」、「聞いて従う」という意味のことばです。最も重要な「従順」は私たちが神に従う、私たちが主に従う、この「従順」です。具体的には私たちがこのみことばに聞き従うのかどうかによって表されます。

3. イエスの教え マタイ20：20-28

きょう私たちは聖書の何カ所かを開いて、この「従順」、また「仕える」ということを一緒に学んでいきたいと思います。マタイ20：20-28をお読みしたいと思います。

:20 そのとき、ゼベダイの子たちの母が、子どもたちといっしょにイエスのもとに来て、ひれ伏して、お願いがありますと言った。

:21 イエスが彼女に、「どんな願いですか。」と言われると、彼女は言った。「私のこのふたりの息子が、あなたの御国で、ひとりあなたはあなたの右に、ひとりあなたは左にすわるようにおことばを下さい。」

:22 けれども、イエスは答えて言われた。「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていないのです。わたしが飲もうとしている杯を飲むことができますか。」彼らは「できます。」と言った。

:23 イエスは言われた。「あなたがたはわたしの杯を飲みはします。しかし、わたしの右と左にすわることは、このわたしの許すことではなく、わたしの父によってそれに備えられた人々があるのです。」

:24 このことを聞いたほかの十人は、このふたりの兄弟のことで腹を立てた。

:25 そこで、イエスは彼らと呼ばせて、言われた。「あなたがたも知っているとおりに、異邦人の支配者たちは彼らを支配し、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。」

:26 あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。

:27 あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、あなたがたのしもべになりなさい。

:28 人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」

と、イエス様は言われました。

1) 背景

このことばの時間的な背景を見ると、マタイ 19 : 1 に「イエスはこの話を終えると、ガリラヤを去って、ヨルダンの向こうにあるユダヤ地方に行かれた。」とあります。イエス様はガリラヤでの宣教を終えて、いよいよエルサレムを目指して、また違うことばで言うならば十字架への道をたどることになります。その後イエス様は 20 : 17-19 で自分がどのようなところに行くのか、自分の先には何が待っているのかを弟子たちに教えられました。そしてマタイ 20 : 29 を見ると、「彼らがエリコを出て行くと、」と書かれています。恐らくイエス様はエリコ近辺で 20-28 節のことばを弟子たちに語られたと推測することができます。

2) ゼベダイの子たちの母の願い 20 : 20-21

イエス様のところにゼベダイの子たちの母が来てお願いをしたと 20-21 節に記されています。21 節でイエス様は「どんな願いですか。」と言われました。するとこの母は「私のこのふたりの息子が、あなたの御国で、ひとはあなたの右に、ひとは左にすわれるようにおことばを下さい。」、こういう願いをします。うちのふたりの息子を位の高いところにつけてほしいと願うのです。ふたりの息子というのはマタイ 4 : 21-22 に出てくるのですが、ヤコブとその兄弟ヨハネのことです。彼らは漁師でした。彼らもイエス様の召しに従って弟子になった者でした。そのふたりを「イエス様、うちの息子を位の高いところにつけてほしいのですが」とこの母は願ったのです。このヤコブという人物は、使徒の中で最初の殉教者になった人物です。そのことが使徒 12 : 2 に記されています。彼はヘロデ・アグリッパによって殺されたと記されています。またもうひとりの息子、ヨハネはペテロとともに最初の迫害を受けたことが使徒 4 : 3 に記されていますし、彼は晩年、パトモス島に流されたと黙示録 1 : 9 に書かれています。そのようなふたりの息子をこの母はぜひ高い位にと願ったのです。

3) 弟子たちの思い違いを指摘する 20 : 22

恐らくイエス様に従っていたほかの弟子たちも、心のうちではイエス様が王座についたら私たちもきっと高い位につけるかもしれない、そのような思いを持っていたのかもしれませんが。この 20 章の前の 19 : 27 でペテロがこんなことを言っています。「そのとき、ペテロはイエスに答えて言った。『ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。私たちは何がいただけるのでしょうか。』」と。自分は全部捨ててあなたに従って来たのです。私たちは何がいただけますかとペテロがことばを出している。恐らく従っていた弟子ひとりひとりがこのような思いの中にあっただのかもしれませんが。ですから、イエス様は彼らの思い違いを 22 節で指摘します。「イエスは答えて言われた。『あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていないのです。』」、イエス様は自分に従って来た弟子たちを高い位につけようと思って彼らを召したわけではありませんでした。その後イエス様は「わたしが飲もうとしている杯を飲むことができますか。』」と弟子たちに問います。この「わたしが飲もうとしている杯」、マルコ 14 : 36 で十字架にかかる前のイエス様は「この杯をわたしから取りのけてください。」と父なる神に祈ります。「この杯を」、まさにイエス・キリストの十字架です。イエス様は弟子たちを自分の身元に引き寄せた。それは何のためか——。それは自分が架かるこの十字架がどういうものであるのかを彼らに教えるためでした。決して彼らを高い地位につけようという思いで彼らを弟子としたわけではなかったのです。しかし、残念ながら弟子たちはそのことをまだまだ理解していなかった。

4) すべては「父なる神」が決めること 20 : 23

イエス様は 23 節で誰がそのような地位につくか、すべて父なる神のなさることだと述べています。

5) 他の 10 人の使徒たちの反応 20 : 24

さて、その後 24 節ではこう書かれています。「このことを聞いたほかの十人は、このふたりの兄弟のことで腹を立てた。」、ヤコブとヨハネの母が息子のことでイエス様をお願いをした。それを聞いたほかの 10 人の弟子たちが「腹を立てた」と記されています。この「腹を立てた」ということばは、新しい皮袋の中で新しいぶどう酒が発酵して煮えたぎっていく、このような状態を指したギリシャ語のことばが使われています。だから彼らの心のうちは大変な思いだったと。私の言いたかったことを彼らが先にイエス様に言った。この残り 10 人の思いは私たちはよく理解できるのではないのでしょうか。

6) イエスの教え 20:25-28

さて、これを見ていたイエス様は、この後弟子たちに大切な教えをします。25-28節です。イエス様は自分がこの地上で王として人々に仕えられるために来たのではないということを知っていましたから、そのことを踏まえてこの後大切な教えをなさいます。

(1) この世

まず25節「イエスは彼らを呼び寄せて、言われた。『あなたがたも知っているとおりに、異邦人の支配者たちは彼らを支配し、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。』、この世の支配者たちは上に立って権力を振るう世の中です。この25節で使われている「支配」ということばは、使徒19:16でも使われていて、そこでは「押さえつけ」と訳されています。だからこれらの支配者たちは世の人々を「押さえつけ」と言うのです。また「権力をふる」と記されています。

(2) 神の国(神の教会)

しかし、神の国、神の教会では違うということを示すために26-27節でイエス様は教えられています。「偉くなりたい……者は、……仕える者になりなさい。」と。この「仕える者」というのは「ディアコノス」というギリシャ語のことばが使われています。これは「給仕する者」という意味です。「人の世話をする者」という意味を持ったことばです。ここから「執事」ということばが生まれています。ですから「偉くなりたいと思う者は」人のお世話をしなさい、給仕をしなさいと言うのです。そして「先に立ちたいと思う者は、……しもべになりなさい。」と。このギリシャ語は「ドゥーロス」ということばです。これは「奴隷」という意味を持っています。「先に立ちたいと思う者は」人の奴隷になりなさいとイエス様は教えられました。

(3) 自分がこの世に来た目的 28節

① 仕えるため

そして28節で、イエス様は自分がこの世に来た目的を明らかにしています。「人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるため」だと。イエス様は自分を指して「人の子」ということばを使われています。この「人の子」は福音書では81回使われていると言われていたのですが、二、三の例外を除いてすべてイエス様は自分を指して「人の子」と言われています。そして、私は「仕えられるため」に来たのではなくて、「仕えるため」に来たのだと言われます。

イザヤ53章を見ると、そこには人々の苦しみを一身に背負ったしもべのことが記されています。まさにイエス・キリスト、その方の預言がそこに記されています。是非53章をお読みください。パウロは2コリント8:9で「主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。」、またピリピ2:7では「ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、」と記しています。

② 贖いの代価として

そしてイエス様は28節の後半で「贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」と言われました。「贖いの代価」、それは奴隷を解放するための身代金、また神の義を満足するために支払われた代金のことです。違うことばで言うとイエス・キリストの十字架です。先ほどもマルコ14:36を少しだけお読みしましたが、そこでイエス様はこう言われています。「この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままを、なさってください。」と。まさにこのイエス・キリストの十字架は父なる神に従う完全な従順であったということです。イエス・キリストは父なる神に完全に従順であったということがあの十字架のわざだったのです。1コリント6:20でパウロはこう言います。「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。」、私たちのことです。またエペソ1:7では「私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。」

このようにイエス様は弟子たちに、自分が何の目的を持ってこの地上に来られたのかを明らかにしました。自分は「仕えるため」に来たのだ。そして、私は「贖いの代価として」あなたがたにいのちを与えると。

4. アブラハムの従順 ヘブル11:8、17(創12:1-4、22:1-10)

私たちはイエス様のほかに、このみことばを通して、この聖書を通して従順に歩んだ者、仕えることを全うした者を知っています。そのひとりにはアブラハムです。

1) ヘブル11:8

この箇所は旧約の信仰の勇者たちのことが記されています。その8節と17節をお読みしたいと思います。ヘブル11:8「信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかわからないで、出て行きました。」、17節「信仰によって、アブラ

ハムは、試みられたときイサクをささげました。彼は約束を与えられていましたが、自分のただひとりの子をささげたのです。」。このことは創世記12章、22章に記されていることですが、8節で「これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました」、創世記12：4では「アブラムは主がお告げになったとおりに出かけた。」とあります。アブラムは主に聞かなかったのです。どこへですか？なぜですか？なぜ私が行くのですか？ではなくて、主が命じられたとおりにそれに従ったのです。そして生まれたウルから出て行くのです。アブラムは主の御声に100%従ったのです。

2) ヘブル11：17

また、ヘブル11：17を見ると、私たち人間はある矛盾を覚えるのです。それは創世記21：12で「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれるからだ。」、アブラムに与えるひとりの息子、イサクからあなたの子孫がふえていく、このように言われた神が創世記22：2では「全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」と。私たちなら「えーっ、神様。あなたはこんな約束を私にくれて、その約束を全うするためには、イサクをあなたに捧げたらその約束はなくなるのではないですか？」と思うはずですが。私はそう思います。しかし、イサクを私に捧げなさいと言われた時に、神が不誠実な方ではないということを確認していましたから、アブラムは神に対する従順さを表すためにイサクを捧げたのです。アブラムはウルから出たこと、また与えられたひとり子イサクを神に捧げたことによって彼の従順さを明らかにしています。

5. パウロの場合 2コリント12：7-9

私たちはまた違う人物を違う角度から見ることができます。それはあのパウロです。2コリント12：7-9、パウロに「一つのとげを与えられ」と記されています。そのとげはパウロが高ぶらないように与えられたと記されています。しかし、パウロはこのとげを取っていただきたいと願ったのですが、主は、いやいやこのとげはあなたにとって大切なものだと言われました。それはなぜか——。このとげはパウロが自分の弱さを知るため、自分の足りなさを知るために与えられたというのです。パウロが自分には誇るものが何一つないことを知るためにこのとげが与えられた。まさにパウロにとっても主の前に謙る、自分をより低くして主に拠り頼む、そのような者へと変えられて行くため、このとげは与えられた。それは主が導いてそのようなことをパウロになしたのです。

6. 人となられたイエス・キリスト ピリピ2：6-8

先ほどマタイ20章で私たちはイエス様がこの地上に来られた目的が何であったのかを見ました。「仕えるため」に来たとイエス様は言われました。そのことをパウロはピリピ2章でもっとわかりやすく私たちに教えてくれています。

ピリピ2：6-8

:6 キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、

:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。

:8 キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。

1) ピリピ2：6

この6節に出てくる「神の御姿」、それは神の本質、性質を持った方という意味です。ヘブル書を著した記者は、ヘブル1：3で「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、」と、イエス様のことを指してこう記しています。イエス様は神の本質の完全な現れであると。そしてそのキリストは「神のあり方を捨てることができないとは考えないで」と6節に書かれています。それはイエス・キリストは神としてこの地上に存在することを絶対に手放したくないと固執しなかったということです。

2) ピリピ2：7

そして「ご自分を無にして」、このことばの解釈で大変誤った意見を持つ人たちが出ました。このことばは「ケノーシス」というギリシャ語「空にして」という意味ですが、ここからケノーシス主義というのを唱える人たちが出ました。それは「神性放棄」です。イエス・キリストがこの地上に来られた。このみことばをもって、そのイエス・キリストは神ではないのだということを唱える者たちが出ました。しかし、みことばを初めから最後まで読むと、イエス・キリストが神であって、永遠に神であることをみことばははっきりと教えています。この「無にして」のところに※がついていますが、欄外の注を見ると、「特権を主張されずに」とあります。それはどういう意味かということ、神の本質である全知とか全能とか偏在、そのような特権を主イエス・キリスト自身が父なる神のみこころに従って制限されたということです。

ここをアンドリュー・マーレーはある本で、「無にして」ということばを「主は（イエス・キリストです）、父なる神がうちにお働きになるためにご自身を、ご自身の意思を、ご自身の力を、全面的に明け渡しておられたのである。」と説明しています。「ご自分を無にして、仕える者の姿をとり」、先ほどは「ディアコノス」ということばを使っていたけれども、ここで使われているギリシャ語は「ドゥーロス」です。ということは「奴隷」です。パウロはイエス・キリストは奴隷としてこの地上に来られたと言います。ご存じのように、今の私たちの周りでは考えられないのですが、この当時、奴隷というのが実際にいました。彼らに全く自由はありませんでした。彼らは人間ではなかったのです。彼らは売り買いできる“物”だったのです。だから所有者の所有物でした。イエス様はそのようなものとしてこの地上に来られたのだと言うのです。

3) ピリピ 2 : 8

第二版の聖書では7節は「人間と同じようになられたのです。」で終わっています。でも第三版は同じ7節でこの後すぐ「人としての性質をもって現れ、」が続いています。第二版では、これは8節に書かれています。しかし、7節に書かれていようが、8節に書かれていようが、その意味するところは全く変わりません。「人間と同じようになられ」、「人としての性質をもって」この地上に来られたということです。ここで私たちは非常に大切なことをしっかりと理解しなければいけません。それはイエス・キリストには罪がなかったということです。私たち人間と決定的に違うところは罪がなかったということです。だからヘブル書の記者は4 : 15で「罪は犯されませんでした」と言います。イエスは人となってこの地上に来られた。しかし、私たちと同じように罪を犯すような人ではなかったということです。

そして、「自分を卑しくし」と8節の中ほどに書かれています。このことばが同じピリピ 2 : 3に「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、」とあります。この「へりくだって」と同じことばです。だから、イエス・キリストは自分を低くして「死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。」と。イエス・キリストが十字架に架かれた。それはみこころであったと聖書に記されています。ヘブル 10 : 10には「このみこころに従って、イエス・キリストのからだは、ただ一度だけさげられたことにより」と記されています。そうです、イエス・キリストの十字架は父なる神に対するイエス・キリストの全き従順を表したものです。イエス様はマタイ 20 : 28で自分の来た目的は「仕えるため」だと言われました。パウロはこのピリピ 2 : 7でイエス・キリストは「仕える者の姿をとり」と記しています。また、ヘブルの記者は 10 : 10で父なる神のみこころに従って十字架に架かれたと述べています。

7. キリスト者として、どう生きるべきか

私たちはイエス・キリストを見ました。また旧約に生きたアブラハムを見ました。また初代教会に生きたパウロを見ました。今現在、救われてこの21世紀に生きている私たちもアブラハムやパウロと同じ生き方に変わったのでしょうか？アブラハムが生きたあの生き方、パウロが生きたあの生き方、それはこのみことばが一貫して教えている救われた者の生き方です。また私たちもそのように生きることを主なる神が一番の喜びとするはずです。1サムエル 15 : 22で「主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」、最高のいけにえは「主の御声に聞き従うこと」だと教えています。詩篇 51 : 17では「神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。」と。二版は「たましい」、三版は「砕かれた霊」と記されています。どちらにしても私たちが捧げる最高のいけにえは砕かれた心です。それを神が一番に喜ばれる。最上のいけにえだと認めてくださるのです。

1) 従順な仕える者として ヤコブ 4 : 6-10、1コリント 13 : 4

最後に私たちが従順な仕える者として歩むには、どのように歩めばいいのかを見て終わりたいと思います。ヤコブ 4 : 6-10を開いてください。

:6 しかし、神は、さらに豊かな恵みを与えてくださいます。ですから、こう言われています。「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。」

:7 ですから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。

:8 神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。罪ある人たち。手を洗いきよめなさい。二心の人たち。心を清くしなさい。

:10 主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高くしてくださいます。

ヤコブは、この箇所を通して私たちがどう生きなければいけないのかを教えてください。

①「神に従いなさい」 7 節

まさに神に信頼し、その命令に従うということです。

②「神に近づきなさい」 8 節

私たちがきよい生活をする、罪から離れるということです。

③「主の御前でへりくだりなさい」 10 節

自分を低くしてすべてを主に委ねるということです。

④「愛を身につける」 1 コリント 13 : 4

私たちはもう一つ非常に大切なみことばを見る必要があります。それは、愛を身につけるということです。1 コリント 13 : 4 で「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。」「愛」は仕える心を生み出すのです。それが「愛」です。だから私たちはヤコブが教えているように、「神に従い」、「神に近づき」、「へりくだり」、そして「愛」を身につけるべきです。

◎ 御霊によって歩みなさい

私たちは私たちの力ではこのような者になれないことをよく知っています。私の力では、あなたの力ではこういう者になることはできません。でもみことばはこの助けによってと言われます。今私たちに内住されている御霊の働きによってそれをなしなさいと教えています。ガラテヤ 5 : 16 「御霊によって歩みなさい」です。御霊に支配されて歩みなさい、そうすれば私たちはヤコブが言うように、またパウロが言うように、あのアブラハムがそうであったように、またパウロがそうであったように、そしてイエス・キリストが私たちに教えたように従順な仕える者としてクリスチャン生活、クリスチャンの歩みを天に凱旋するまで送ることが可能になるということです。私たちがこの地上で過ごす時間はそう多くはありません。私たちは今からそのように歩むことが可能です。天に帰った時に、「よくやった。……忠実なしもべだ」（マタイ 25 : 21）と言われるような信仰者としてともに残された時間を歩みたいものです。